
ナノ～世界を変える能力～

朝倉 航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナノく世界を変える能力く

【Nコード】

N6788B

【作者名】

朝倉 航

【あらすじ】

あるなんの変哲もない不良高校生、十文字大貴。だが、ある朝のホームルームで杉尾未久というクラスメイトにナノの戦士にスカウトされる。果たしてナノというものはなんだろうか？十文字大貴の長く、厳しい戦いが始まろうとしていた・・・

ミッション1 運命（前書き）

恋愛、バトルシーンが沢山ありますので、興味のない方は読まないでください。

ミッション1 運命

「早く飯作れよ」それが彼の朝一番に言う言葉だった。彼はその一言を言つと、顔を洗い歯を磨き、制服とガラシヤツを着て、携帯をポケットに入れ、ピアスをつけた。

彼はそれが終わるとできた朝飯を食べ、また歯を磨き、家を出た。まさか今日が彼の平凡な人生をぶち壊すとは微塵とも思っていなかった・・・もうとつくに登校時間が過ぎて門が閉まっている鳳高校、

「まあ、いつものことか。」と小声で独り言を言つて門をよじ登り、誰もいない朝のホームルームのグラウンド、彼は好きだった。

でもよく見ると、友達の伸納と出雲と間がいた。

「おう」彼がそういうと三人が

「今日もおつせえなあ大貴。」と返してきた。

大貴は彼の名前。十文字という変わった名字を持つ高校1年の学年1の不良なのであった。

「どうしたその傷？」大貴がそういうと、三人は顔赤らめて、

「あの・・・情けねえが杉尾にやられた・・・」三人はかなり恥ずかしそうに言った。

「杉尾なんかに！？」大貴は信じられないという表情で三人を見つめた。そこで大貴は自信たつぷりに

「よっしゃあ！行くか！」と言い、三人と一緒に校舎へ入った。

四人はクラスに入ると教師がまだ朝のホームルームをやっていた。誰も聞いてないからな。と思いながら辺りを見回した。いた。杉尾が四人の友達と机の上で座りながら話していた。

「おい、あんま調子乗んなよ。」大貴は杉尾達をにらみつけた。

「なに？調子乗ってんのはテメエらだろ！」杉尾以外の四人が反

抗してきた。

そんな中、杉尾だけは平常心だった。杉尾とは中学から同じで、なにかと対立してきた。制服じゃなく私服で髪も三色に色分けしている。俺の金髪なんかまだまだなあとか思っているうちに、杉尾がこっちを見てきた。

「なんだよ？」杉尾がこっちにガンとばしてきたので、ガン返した。もうちょっとした乱闘になってたが、いきなり杉尾が表情を変えた。

「ちよつとこっち来な。」杉尾は教室を出てついてこいという感じで催促してきた。

「はあ？」と思いながらついていった。なんだか変な感じがしてならなかった。なにより俺はこいつのことが好きだった。

階段を上って屋上についた。

「なにをするつもりなんだ？」俺は問うた。「お前を見てわかった。お前はナノの素質がある。だからお前をナノの戦士にスカウトする！」

「はあ？」俺はもう訳が分からなかった。ナノって何だ？俺はどこに向かっているんだ？そもそもいきなり何だ？図々しい。

桜が舞う春風に包まれて大貴は死にたくなりそうぐらい訳が分からなかった。

ミッション1 運命（後書き）

頑張って書き続けるので応援よろしくお願いします！

ミッション2 全貌

俺は今、とても焦ってる。だって、いきなりあんなこと言われたら誰だって動揺するよ！

「ナノについては今日の夜八時に学校のグラウンドに来たら話す。絶対来いよ！」杉尾が今日の朝言った言葉だった。

そして午後七時、学校まで五十分、速く行かないと・・・でも、杉尾がいきなりあんなこと言うとは・・・

七時五十五分、大貴は夜の静かなグラウンドをうろついてた。

「遅えなあ・・・」そんなことを言っていると誰かが来た。女つばいのが二人いる。誰だ？それと一人は翼が生えている。もう夢かもしれないと思った。そのシークレットが近付いてきてはつきり、明確なものになった。

「え？嘘だろ？」大貴はついひざまづいてしまった。二人のうち一人は杉尾だった。右腕が剣になっている。これがナノの力？化け物になるのがナノ？大貴は怖くなった。

「先に来てたんだね。十文字。」杉尾がそう言った。

「その右腕・・・、す、すごいことになってんぞ！」大貴は思わず言った。ここで右腕を無視してたら一生ナノについて教えてくれないと思ったからだった。「これがナノの力。あなたにもこの力があるのよ。」杉尾を優しく言った。

「全員右腕に剣が生えんのか？だって、朝の時点でなんもなかったじゃんか。」大貴は根掘り葉掘り聞いた。

「ちよつと待って。落ち着いて。今からナノについて話すから。」杉尾は深呼吸して、落ち着いて、ゆっくり、大貴に分かるように話

した。「五百年前、イギリスを中心としたヨーロッパ各国でナノについて発表された・・・まあナノというのは人の闘争心をベースに、現代科学では不可能な人の体を急速な細胞組換えで私の右腕みたいにするの。まあ、いわば人の闘争心を具現化したものね。もちろん、ナノの能力については、人によって千差万別。この私の剣の能力は、「マスターソード」と言って、自分自身の精神と肉体を鍛練することで色々な属性攻撃ができるの。ちなみにこの娘は・・・」

「いいよ、未久。自分で言うから。久しぶり！十文字。」

翼を生やしていたのは杉尾とは小学校からずっと一緒に、大貴と中学ずっと同じクラスだった、小野真未だった。

「小野・・・お前・・・」杉尾より変だった。だって、翼が生える。天使の翼みたいなのが・・・

「このナノは、「ウェンディウイング」という風を操るナノ。空も翔べるよ。」真未が驚いている大貴に面白そうに言った。

「ちょっと待て。で、何をするんだ？一般的に。」大貴はこのナノという力にはどんなことがあるのか、不思議で不思議でたまらなかった。

「うーんと・・・どう説明したらいいか・・・」杉尾が困っていると「私が言っているいい？」小野は自信たっぷりにそう言った。正直、小野と杉尾は、性格的にあわないと思っていた。小野は少しおとなしめだが、杉尾はもう超ヤンキーだった。こんな二人が親友っていうのは以外だ。人間って奥が深いなあと思った。

「ナノは一般的に強盗や殺人から人を守ってその犯人を始末すること。しかしそれだけじゃない。ナノの力が珍しいからって、ナノ使いを殺して、細胞を採取してナノ使いになるの。」真未がそこまですぐで言い終わると

「え？ナノってそんな簡単にできるのか？」大貴は思わずそう言うのと、「そう。細胞を採取してナノ使いになるのは簡単じゃない。ナノが発見されて十年後にナノの力を悪用しようとするナノ狩りが現れた。現在ナノ狩りは日本を標的に動いている。だから・・・」

杉尾が割り込んで言ってるうちに、誰かが現れた。

「おや、こんな夜中にお喋りですか？親が心配するでちよ？」
「気持悪い赤ちゃん語を使う大きな鎌を持った男がこっちに近付いてきた。」

「お前・・・ナノ狩りだな？」杉尾がそう言う

「そうでちゅよ。俺はポーンの飯草三喜男でちゅ。三人まとめて殺してやるう！」

「こいつは雑魚だな・・・よしいい機会だし十字、お前が行って倒してこい！」杉尾がそう言って大貴の肩をポンと叩いた。

「え？マジで？」大貴が戸惑って言う

「頑張れ、必ずたおせるよ・・・」杉尾のそんな言葉に弱かった。俺は思わず杉尾の手をとって、

「俺・・・絶対勝つよ・・・」そう言って敵の方を向いた。

「じゃあ・・・いう通りして・・・あいつを殺すという殺意と、怒りを剥き出しにして。そうすると絶対、発動するから！」杉尾に言われた通りに殺意と怒りをあらわにした。「長々と喋るな！まずは弱そうな男から行くでちゅ！」飯草がそう言って鎌を振り回してきた。

その時大貴は落ちていて心を殺意と怒りだけにした。その時大貴の姿が急激に変わっていった。髪は真っ黒な綺麗な髪質になり、体は悪魔に近い感じの赤みがかかった茶色になり、目は赤色、そして真っ黒な翼と真っ黒な尻尾がでてきた。

「悪魔の・・・ナノ？私達と違って体全体が変化するなんて・・・すごいナノかも。」杉尾と小野があっけとられていると、大貴はそんなことに全然気付きもせず、飯草に向かっていった。「ちよつと待つでちゅ！殺すのはやめるでちゅ！」飯草の命ごいしてるにも関わらず

「死ねえ！化け物！」大貴はただ真っ直ぐに飯草の方に翔んで行って飯草の心臓を突き刺した。

「ぐはぁ・・・」飯草は苦しそうにあえぐ。

「血がグラウンドにいたら大変だ。焼き尽す！」大貴は口から灼熱の炎を吹きだした。飯草は跡形もなく焼き尽された。「やつたぜ・・・俺・・・」大貴はそう言つと倒れた。杉尾が膝で抱えて「無理もないわね・・・初めての発動だから力を使い果たしたのね・・・」杉尾は優しく言つた。

「どうする？どこ連れてく？」小野がそう言つと

「十文字の家知らないから私の家にでも連れて帰るわ・・・」杉尾はそう言つて大貴をおぶつた。

「私も手伝うよ。」小野と杉尾は二人で大貴を運んだ。夜桜が咲き乱れる夜に・・・

ミッション3 決断

「マジかよっ！？ここどこ？」眩しい眩しい春の早朝、大貴は誰か分からない部屋のベッドの上にいた。しかも制服だったはずがジャージ姿になっていた。

「誰かに・・・脱がされた！？え・・・」大貴が一人でそんなこと言っただけでハアハア妄想していると誰かが部屋に入ってきた。

「おはよう。ぐっすり眠れた？」杉尾が部屋に入ってきた。

「何で？お前が・・・ここに・・・」大貴はあせってそう言った。

「ああ。ここ私の家で私の部屋。あなたがナノの力を使っただけで、そのままぐっすり爆睡したから、私の部屋に連れてきただけよ。それが何？」杉尾が鬱陶しそうに言った。「別に・・・何もありません・・・」大貴はここで下手に反抗でもすると、すぐに追い出される感じがしたから何も言わないことにした。

「杉尾・・・」緊張してガクガクの大貴はそのくらいしか言うことができなかった。

「杉尾って呼ぶのもいいけど私達はナノの戦友だ。できれば下の名前で呼んでほしい。」杉尾がそう言った。

「じゃあ・・・未・・・未久・・・」大貴は恥ずかしかった。いきなり好きな女に下の名前で呼べなんて言われたら誰だって喜んだら緊張したりするのは当然と思う。「さあそういうことで私達は今就いている任務を紹介する。」未久がそう言う大貴は何回も頷いた。

「今私と真未が就いている任務はここ近辺にあるという、ナノ狩りのアジトを潰すということ。アジトには何が待っているかわからない。慎重に進めていって、今真未がアジトに行っただけで雑魚を粗方倒しに行ってる。」未久は長々と話続けた。

「え？今日あれ・・・学校だけ何してんの学校行かんでいいん？」大貴は心配そうに言った。

「そうそう、いい忘れてたけどこの戦いに就くんだったら、高校生活は諦めた方がいいよ。学校と両立は不可能に近いから。大貴、もし本気でナノの戦士になるんだったら、そういうところも覚悟してね・・・将来を大きく変えることだから・・・今日中に答えを出して。今から学校に行つていいけど私は休む。真未と連絡をとり合わなくちゃいけない。」そう言つて大貴を学校へ行くよう言つた。

学校でもずっと考えていた。本当に将来を大きく変えることだ。断ればこのまま平和な生活、了承すれば命がけの厳しい生活。俺は今人生の分かれ道にいる・・・学校でも、ずっと考えていた。断ればこのまま平和な生活、了承すれば命がけの戦いだらけの生活。本当に難しい選択だった。

「断ろうかな・・・だけど女子だけを戦わせるのは性に合わねえし・・・」そうやって友達も何もかもすっぱかして考えた。そんなこと言っているうちにもう学校が終わった。後は家に帰つて考えることにした。

しかし家で考えてもたいして強い決断はできなかった。大貴はもう思いきつて決断をしたように家を出た。

春なのに少し肌寒い風が吹いてきた。桜には少々こたえるらしく、花びらがひらひら、ひらひらと舞った。そんなこんなで長々と走つて未久の家に着いた。大貴は息を飲んで未久の家のインターホンを押した。

「誰？」母親らしき人が出た。

「大貴だけど。」未久の母親には前会つたことがある。だから分かってくれるだろう。

「誰か分かんないけど未久を呼べばいいんだろ？」そう言つて未久の母親は未久を呼びにいった。しばらくして未久が家から出てきた。

「ちゃんと決めた？とりあえず中に入つて。早く。」そう言つて

未久は大貴を中に入れて自分の部屋へ連れていった。「答えはどうなった？どう？」一旦降りてコーヒーを取りに行った未久がそう言った。

「ああ。決まった。俺はナノの戦士になる。もう覚悟はできた。」大貴は自信たつぷりに言った。

「そう・・・じゃあ決まりだな。今から、ナノ狩りのアジトに向かうぞ！」未久は面白いことが起こるという感じで言った。

肌寒い春の夜、ある一人のイケメンな不良が人生を大きく変える決断をした。

ミッション3 決断（後書き）

少しずつですが確実に読者数が増えています。面倒ですが感想、評価してくれるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6788b/>

ナノ～世界を変える能力～

2010年10月10日04時14分発行